中学生広島平和教育研修

参加者5名が研修で感じた思いや決意を紹介します。

富士見中学校２年
小林（こばやし） みずき

「広島研修で感じた事」

七十四年前、原爆が投下された爆心地近くに私達は行きました。その場所に立った時、「七十五年は草木も生えぬ」とまで言われたほどの大きな被害を受けたにもかかわらず、町の復興に向けて人々が立ち上がり町を再建していった広島の市民の血のにじむような努力を感じました。

事前学習で原爆が投下されたあとの写真を見せていただきました。復興した町の中で被害を受けたままの原爆ドームが残されているのを見て、私は不思議に思いました。原爆の事を思い出させてしまうのに、どうして残されているのだろうと。

この答えは、実際にその場所に行って知ることが出来ました。どんどん市街地が復興していって被爆建物が姿を消していきました。

その中で原爆の悲惨さを後世に伝えるために広島市民が希望し、残されたそうです。実際に自分の目で原爆ドームの姿を見た事により、戦争の怖さをより強く感じました。

当時広島には本川小学校と袋町小学校がありました。今はどちらも資料館になっています。

本川小学校は爆心地から一番近い小学校でした。十一人の教員と四百人の生徒がいた中で、先生一人と生徒一人しか助かりませんでした。ケガ人がたくさん運ばれ救護所としても使われたそうです。

袋町小学校は避難所や救護所として使われるとともに住民達の安否をたずねる場所になったそうです。黒板には残っていたチョークを使って、消息が分からない小学一年生の娘の行方を必死にたずねる母の言葉、自分の安否や居場所を家族や知り合いに知らせようと書き記したたくさんの伝言が残したままにしてありました。困っている生徒が自分の元に来れるようにと学校の先生が自分の住所を書いていました。自分自身も大変な状況の中、困っている生徒のために何とかしようとしていた姿に、広島の人の深い絆を感じました。

被爆した本川小学校と袋町小学校の資料館を見学して、戦争がひとりひとりの人生を奪い悲惨な傷跡を残していったのがよく分かりました。戦争のすさまじさを目の当たりにした事で、二度と起こしてはいけないものだと感じました。

この研修の中で特に心に残ったのは、平和記念資料館の見学と「原爆被爆者八・六証言のつどい」に参加したことです。

平和記念資料館では、被爆し今にも死にそうな少女がなんとかお母さんの元へたどりつき、お母さんに抱きついて、安心してその腕の中で息を引き取った、という話が展示されていました。その話を読んで、少女とお母さんの思いに涙がこぼれそうになりました。

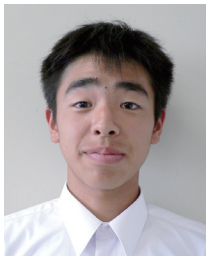
一発の原子爆弾によって広島は大きく変わってしまいました。

「原爆被爆者八・六証言のつどい」で被害者の方は、「原爆は身も心も奪っていった。」と言いました。原爆についての被害者の体験を話してくれる人が高齢で減っている中、貴重な話を聞く事が出来て良かったです。核兵器はこの世界にあってはならない物と強く思いました。今年の平和宣言で、十八歳の時に被爆した男性が、

「絶対にあのような事を後世の人達に体験させてはならない。私たちの苦痛は、もう私達だけでよい。」

と訴えた言葉が読まれていました。

もうあの日のような事が世界で起きないように、私は三日間で学んだ事を富士見中や富士見町の人に伝えていきたいと思います。



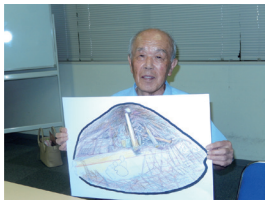
富士見中学校２年
春山（はるやま） 源翔（みなと）

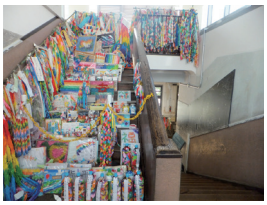
「広島研修で学んだこと」

皆さんは「平和」という言葉を聞いて、何を思い浮かべ、何を感じますか。僕は言葉のイメージをすることができても、その深い意味や具体的な内容を思い浮かべることができませんでした。しかし、広島研修を通して「平和」について学ぶ中で、自分なりの考えを持つことができました。

平和記念式典に参列して、「黙とう」を捧げました。会場は数えきれない人たちであふれていました。その中には多くの外国の人もいて、世界中に平和を願う人がたくさんいることを知り、驚きました。

原爆被害者証言のつどいに参加し、被爆者の方から貴重なお話を聞くことができました。お話をしてくださった方は、妹さんとお母さんの三人が一緒に自宅で被爆し、ガラスで負傷したそうです。その後、火災により自宅は全焼しました。お姉さんは、小学校の教室から校庭に飛ばされ、左腕に大やけどを負いました。お父さんは、爆心地から八百五十メートルの所で被爆し、亡くなりました。お父さ





んが、ひん死の状態で自宅があった場所にいたと近所の方から聞いて、お父さんの思いを察し、涙が出たと言っていました。当時、証言者の方はまだ三歳だったため、原爆についてはあまり記憶になく、母親に聞いたそうです。しかし、聞こうとする度に機嫌が悪くなり、教えてくれなかったそうです。それほどまでに、原爆は思い出したくない、悲しくて辛い出来事だと感じ、胸が苦しくなりました。僕にとって、一番印象に残った内容です。証言者の方は、ずっと将来への得体のしれない不安を抱えて過ごしてきたそうです。

平和記念資料館では、ある男の子の言葉が目に入ってきました。

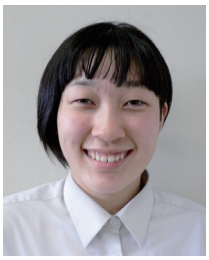
「僕はいいから、母さんをたすけて。」

この言葉を見て、心臓が押し潰されそうになりました。その男の子も苦しいはずなのに、大切な母を守ろうとした、その気持ちに感動しました。当時男の子が着ていた服が展示してありました。それは国民服と呼ばれるものと、もんぺや地下たびで、どれも裂けてボロボロになっていて当時の悲惨さが伝わってきました。

他にも「真っ黒になったお弁当箱」や、「八時十五分で止まっている時計」など、本当にこれが現実に起こってしまったのかと信じられないことがいくつもありました。

僕が考える平和とは、戦争や争い事が無く、人が悲しまずに暮らせることだと思います。一人一人の普通は違うので、それが幸せであり、平和だと思います。

原爆は本当に恐ろしいものです。それで幸せになる人なんていません。原爆は一瞬で全てを破壊し、多くの人々の命を奪います。被爆者は七十四年たった今でも、その被害に苦しめられています。その苦しみを少しでも知ることができた僕たちには、原爆の恐ろしさ、悲惨さを伝えていく義務があると感じました。このような残酷な悲劇を、もう誰も体験して欲しくないと思います。



富士見中学校２年
中山（なかやま） 由姫菜（ゆきな）

「光と影」

今の広島は、青い空と太陽が人々を照らし、商店街は、たくさんの人でにぎわっています。そんな今の広島に起きた、暗く悲しい過去について私は学んできました。

私は、八月六日に広島市原爆死没者慰霊式と平和祈念式に参加しました。そこには、たくさんの人がいて日本人だけではなく、外国の方も多くいました。私は、日本人だけではなく、外国の方も原爆のことを知り、もう二度と戦争をしないように次の世代へ広めてくれるのではないかと思いました。平和記念式典を行った平和記念公園の下には、原爆が投下された時の土や石、がれきや亡くなった方の遺体が眠っていると聞きました。この話を聞いて、時代が変わっていっても悲しい過去を忘れないために原爆が投下された当時の物が下で眠っているんだなと思いました。また、被爆者の方から話を聞く機会もありました。その方のお名前は、田所明子さんです。三歳の時に被爆したそうです。当時のことは、あまり覚えていないそうですが、お母さんやお姉さんから聞いたことを話してくれました。私が田所さんから話を聞いて心に残ったのは、田所さんのお父さんのことです。田所さんのお父さんは、原爆によって亡くなったそうです。お父さんの遺骨が二つ見つかって、どちらが本当の骨か分からなかったそうですが、遺骨が見つかっただけでもうれしかったと話してくれました。その時の田所さんの目は、とても悲しそうでさみしそうでした。戦後の生活は、お父さんがいなかったため、とても苦しかったと聞きました。アメリカが悪いとお母さんから小さい頃に言われていてずっとそう思っていたそうです。しかし、歳を重ねる中で、歴史を学び日本も悪かったと気づいたそうです。もし私が、自分の父を亡くしたら、立ち直ることもできず、人に話すことなんてできないと思います。田所さんは、苦しい気持ちを乗り越えて次の世代に伝えるということをしてくれています。だから、私達が今度は、私達の周りや次の世代へ口から口へと伝えていかなければなりません。平和記念資料館では、言葉にできないぐらい悲しい写真や当時の服、遺留品などを見てきました。目を背けたくなる写真や絵がありましたが、現実から逃げないようにしっかりと目に焼き付けて来ました。とても悲しくなりました。私は、これまでなんて幸せに暮らせて来たのだろうかと思いました。家族がいて、食べる物があって、服があって、私にとってそれは、当たり前です。戦争の時は、違ったのだと思いました。私は、今の日本を光と影で表すことができると思います。光は平和な明るい未来で、影は悲惨な過去を表しています。光と影の間には、今があります。明るい未来のために今、過去の悲惨な思いを伝えていく必要があると思います。私が被爆者の方の話を次の世代に伝え、もう二度と戦争が起きないよう行動します。そして、五十年後、百年後の世界にも平和な明るい未来があることを願っています。